

異文化としてのキャリフォルニア

武田光史

I

文化遺産にはじまって文化国家等々々、文化、文化、文化と何となく文化がかまびすしい昨今であるが、そも文化とは一体何であろうか。「文化」とは『広辞苑』によると、三番目 (Culture) の意味として「人間が学習によって社会から習得した生活の仕方の総称。衣食住を初め技術・学問・芸術・道徳・宗教など物心両面にわたる生活形成の様式と内容とを含む。」と説明されているが、はて何の事やらおぼろ気にはわかったようでも十分には理解できない。また我が国では祝日として「文化の日」まで制定されており、要するに自分なりに言いかえてみるに「我々日常の生活・習慣から生まれ出る所の把え所のない諸々の現象・結果の総体」とでもしか言いようがないが、それでもわかったようでわからない。

このように明確には定義できない「文化」ではあるが、あえて『異文化としてのキャリフォルニア』(California を米語発音通りに記しておきたい。日本ではカリフォルニアと言っているがこれは発音からわかるようにスペイン・ラテン語流の呼び方であり、また原義は不明だが黄金郷エル・ドラドを意味する。なお現地の日系人は加州と言っている) と題して昨夏のホームステイ体験旅行で本学学生に同行した体験を含めて自分なりにとらえた文化論を試みしてみる次第である(なおフィクションとしては「キャリフォルニア体験紀行」、『文芸吉備』、第三号があるので参照されたい)。当然のことながらこの文化論には題目が示唆しているように、日本より太平洋を越えて眺めた場合の異文化としてのキャリフォルニアがあるのであり、また一方ではキャリフォルニア自体の中に異文化が並存・潜在しているという事でもある。

ところで日本人にとって外人とは依然としてアメリカ人でありしかもヨーロッパ系というヨーロッパ系アメリカ人に対する迎合主義と劣等・卑下意識が戦後40年たった現在でも根強く残っており、しかも日本とアメリカとの悲惨な歴史などケロリと忘れて知ろうともせず、さらに貿易摩擦という問題(その裏には“アンフェア”という侮辱的表現にうかがえる文化摩擦という問題も潜んでいる)が起こりながらも、一般には無理解に受け入れ、いや知らん顔して集団で闊歩するという態度でもある。ある面では知らぬ事ほど強いものはないが、これほど危険な態度もないのである。

新婚旅行はハワイを通り越してキャリフォルニアまで、さほど受験勉強の必要でない私立高校生を中心としたホームステイ体験はサンフランシスコ南方のサンノゼ(キャリフォルニアの呼び方とは異なって、サンノゼは英語流だとサンジョウズ (San Jose) でありスペイン語流だとサンホセのはずだが、まさにスパングリッシュとしか言いようがなく、現地発音流に記しておきたい)でかそれともロスアンゼルス南方のサンディエゴで、そして留学するならとにかくにも UCLA かパークレー(親の sne かじりで大金をはたいて入学はできても、卒業できるとは限らないのだが)で。高度経済成長のおか

げなのか浮かれ調子で誰も彼もがキャリフォルニアへ、アメリカへというこのような風潮に対するアンチ・テーゼとしての、また近視眼的日本人に対する覚醒の意味を込めての、さらにまた

日本人はいま、簡単にアメリカ西海岸に旅に出かけている。それでいながら、その土地の歴史や風土、生活様式や価値観などについて、十分な理解をもっていない。これはまたアメリカ人の対日姿勢でも同様であり、そのために摩擦は一層深刻なものになってしまうのである。

アメリカのなかでのカリフォルニアの位置、そればかりか、世界のなかでのカリフォルニアの地位はおそらくこれからも高まるばかりなので、太平洋時代の一翼を担う日本との相互理解は、ますますその重要性を深めることになるだろう。

猿谷要・我妻洋編『カリフォルニア・レポート』(有斐閣, 1965年) 51~52ページ

というその重要性のためといった意味を込めての、「異文化」についても考えてみたい。

II

キャリフォルニアという行つた事のある日本人からさえ一様に「気候が良い」という答えが返ってくるが、よく考えてみるに果してそうであろうか。確かにヨーロッパ人とりわけスペインはじめ南ヨーロッパ系の人々にとっては同じように乾燥した気候で住み易いかも知れない(ちなみに北欧系の人々は類似した気候の北部ワシントン州を中心にして住む傾向があり、しかも英語の成り立ちからして当然なのだが彼等のしゃべる英語はあたかも信州の雪解け水を飲んでいのかのようにスーと理解できるから不思議である)、がしかし日本人にとってはどうであろうか。夏はより一層乾燥しているが故に日本とは同じくらいの緯度にありながらも陽光は非常にきつく、皮膚の底までまっ黒となり、汗もかかないのに喉はカラカラ(従ってあの薄いコーヒーをがぶ飲み、コーラもただ喉の渴きをいやすためだけにがぶ飲み、ビールを飲んでも汗をかかないから調子が狂い少しもうまく感じない)、そして頭の髪はパサパサ、唇はヒリヒリ、しかも冬期になっても焦げついた皮膚の色はそれほど元にはもどらない。もちろん生まれながらにして浅黒い日本人もいるにはいるが、元来が日本人の膚はキメ細やかで色白という観点からすると、外面だけからしてすでに日本人ではなくなってしまうのである。

日本のような気候風土においては四季折々の味わい深い美味な食べ物が多くあるのに対して、キャリフォルニアの砂の土地では牧牛のための草しか生えず、たとえ灌漑設備ができたとしてもだだっ広い砂の土地では日本人の口にあう物はほとんど何も作れない。野菜はごわごわと固い物しかできないし、果物にしてもオレンジとブドウ以外にはろくに味もなくうまい物はみられない。従ってブツ切りにして碗に盛った野菜サラダに厚くて大きな牛の肉をガツガツ食ってそして最後には舌のとろけるほど甘いアイスクリームとくれば、丸々と肥えたビヤ樽になるのも当たり前(筆者も学生のホームステイ場所サンノゼに着いた夜早々、キャリフォルニアでニューヨークでもあるまいしとは思ったが、どでかいニュー

ヨーク・ステーキとかをすすめられて無理やり胃に詰め込んだ体験を記しておきたい)なのである。

老いも若きも男も女も、夏にはショーパンにだぶだぶのシャツ姿というのがよく眼にはいる。よく見ると特にヨーロッパ系はすでに三十すぎにしてヒップはたるんでぶよぶよのシワだらけ、背中には濃いうぶ毛がはえてシミだらけ、なるほど誰が言いだしたかワイルド・ピッグとはうまく形容したものである。それにくらべると日本人は、むし暑い夏といえども男は長いズボンをはき女はスカートと服装はきちんとしており、たとえ老年になろうとも少しぐらい皺はできるがぜい肉もつかず引き締まったままである。日本人は背が低く髪も黒く鼻も低く眼も小さいというそれだけの理由などで何もピッグの連中に卑下する必要はないのである。

一年を通して空気は乾いておりしかも陽光が強いという気候風土は、そこに住む人間の肉体だけではなく精神風土をも決定づけることになる。ブタであるが故にまっ昼間でもなんら人眼をはばかり事なくさらに100キロ以上でぶっとぼしている車の中でまで、ことに若い連中は鼻つき合わせていちゃついており、また個人主義的自己主張にたけた仰々しい陽気さに輪をかけたようにしゃべる英語には独特の訛りがある上にしゃべる口調は調子にのってペラペラとますます早口となり(こちら最初のうちには“オー イエス アイ スィー、ザ’ツ ファイン”とか適当に相づちを打ち、聞き取れない時は“パードン?”とか“パードン ミイ?”と言ってはいたが、そのうちこっちもニコリ笑って“カリフォルニアン エングリッシュ イズ トゥー フェアスト!”と言い返してやり、そしてこんなペランメエ・エングリッシュなど身につけようなどさらさら思わず、ついには嫌悪感さえ感じて来た次第である)、そしてさらにブリティッシュ・イングリッシュがゆったりとして抑揚のきいた All Right であるのに対してここでは OK OK の連発で、まさにオッケオッケのメリケン語としか言いようがない。しゃべる言葉がそうであるのに加えて歴史が浅いが故に一見して非常に華やかで形式ばらず率直そうには見えるが、何らの「潤い」といったものが感じられず頹廢的消費文明に毒された現実主義的「がさつき」がはびこっていると言っても過言ではない。

以上、日本に生まれ育った純粋な日本人として見たカリフォルニアについて述べてみた訳であるが、ところが逆にあちら側から日本人を眺めるとどうなるであろうか。太平洋戦争中における日系人の強制収容所送りを頂点とする人種差別を正当化するためにすでに1900年より叫ばれていた“ジャップスアー アンアスィミラブル”(ジャップの奴らは同化不能なんだ)という言葉は現在でも意識裏には流れており、それが証拠に

カリフォルニア州サンノゼの高校では、落書の中に「ジャップス」「ニップス」「グークス」(黄色人種の蔑称)「スラントアイズ」(吊り上がった目)「スロープヘッズ」(絶壁頭)といったことばが目立つようになってきたという。中には「ザップ・ザ・ジャップ」(日本人を殺せ)といった表現もあるそうだから、恐ろしい。

千葉教子「アジア人ショック in USA」、『中央公論』(1985年、12月号) 250ページ

というのが現実の一断面でもある。北はシリコン・ヴァリーでの半導体摩擦、南のロスアンゼルスは日

系企業の進出がすさまじく東京都ロス区とまで言ってもおかしくない現在、この潜在意識がいつ何時に表面化し爆発しないとも限らない。いや小さな問題はすでにいくらかも起っており、その一例として筆者の宿泊していた一泊が一万円以上もするモーター・インでの件（安上がりにもなり学生と同じようにホームステイをしてもよかったのであるが、いやとどのつまりは高くつくのであろうが、一人前の日本男児としてみも知らぬ他人の家に、外国ならかまわんという理由など決って成り立たないと思ったが故に、三週間もの長きに渡って、いやたとえ一週間たりとも、居そうろうなど出来なかったのである）を述べておきたい。ある日のこと、部屋からの通話が故障しており（アメリカ製自動車もよく故障していたが、その他自動販売機とか製氷機などが故障するのはしょっちゅうである）、フロントへ行って掛けてもらっていた所いきなり“デァッド ライン”と言うので、（日系人の息子の方へ電話をしており、もし不在なら父親の方へ掛けるつもりであったのだがそんな事は何も伝えていなかったのに）こちらも一瞬びっくりして“デァッド ライン？… ホワッ’ツ デァッド ライン？”と聞いてやった所、いきなり前でオペレーターを相手に“ヒイ’ズ ア ジャパニーズ（ジャップとは言わなかったが）、アイ キャン’ト コミュニケイト”などとぬかしおった次第である。後ほど考えてみるにデッドをデァッドと発音したが故に意志疎通を欠いた訳であるが、日本人のしゃべる英語がいかにもまずいとは言えデッドをデァッドと発音するバカは、筆者の英語教師としての経験上から判断してもまずいという事を付け加えておきたい。ケァリフォルニアにはこういう英語でない英語をしゃべる連中がたとえヨーロッパ系の中にもわんさかいるという事なのである。ついでながら東部からケァリフォルニアを眺めると、次のようになるのである。

出来の悪いのはカリフォルニアへ行け、という言葉が現在でも東部世界にはある。あそこはチカーノとオリエンタルの巣窟だ、という言葉もある。あそこは色気違い（ハリウッド）とホモ（サンフランシスコ）と気違い宗教の発祥地だという風評もある。あそこ女子大生はオッパイを半分出し、パンティまで見える短パンをはいて通学するという評判もある。あそこはアイオワの年金生活者が、死ぬ前に太陽が見たいからと言って出かける老人ホームだ、という話もある。

石川好『カリフォルニア・ナウ』（中公新書、1984年）167～8ページ

III

北から南まで膚の色も髪の色も同じで単一民族（と言われているが、厳密には大和を中心にして蝦夷の北方、琉球諸島よりの南方、さらに中国大陸・朝鮮半島よりの漢・韓族よりなる混合民族）である日本に対してアメリカとアメリカが凝縮した形でのニューヨークなりは「人種のるつぼ」とよく言われるが、桃色・黒色・黄色と多くの人種が住んでいるという意味だけではるつぼかも知れないがこれでは意味があいまい（場合によっては野るつぼの一種とも受け取られかねない）となり、英語での原義は“メルティング ポット”つまり語呂の響きは悪いが溶解炉と訳するのが妥当なのである。しかし現実にはこの

アメリカの一つの大きな理念である様々な人種が溶解して同じ炉の中の国民になる（英語を話し、最初の移住者アングロ・サクソンの価値規範と文化を受け入れる）という方向には進んでいないのである。

マイナリティ・グループの擁護者ジョン・ケネディー大統領（彼はアングロ・サクソン以外の初めての大統領であり、アイアリッシュでカソリックであったのは御存知であろう。であるからこそあの南部ダラスでの暗殺は必然の結末であったとも言いうるのだが）の登場により“ブリティッシュイズビューティフル”という主張にうかがえる奴隷として連れて来られ最も虐げられていたアフリカ系をはじめマイナリティ・グループによるヨーロッパ系と同じ権利を求めての公民権運動の高まりがある一方、キャリフォルニアでは特にサラダ・ボウル（野菜サラダのお碗）、つまり種々雑多な人種・民族が住んでいるが各自の独自性を求めて独自の文化を持ち決って一つの炉の中で溶け合えず、むしろ各集団での分化の方向へ進んでいる、これが現実の姿でもある。サンフランシスコの南にあるサンノゼとして、かつて日系人が市長になった事もあるがその例外ではなく、日系人はダウン・タウンの中心サンタ・クララ通りから数通り離れたジャクソン通りに小規模ながら完全とってよいほどの日本の文化圏を形成して住んでおり、その一角にあるレストラン「古都」での体験を述べておきたい。このレストランは週末になると10時に閉店してより老若男女の日系人が集まって来ての日本以上に日本的なカラオケ大会が催される。その夜、同じ軒下のつづきにあるバー「伏見」のカウンターにたまたま腰かけていたヨーロッパ系の老人が半ば好奇心で半ばは憎々しげに“ジャパニーズ・アメリカンズアーオールザセイム”とこちらに向かって吐いたのである。また別の日にはサンタ・クララ通りで「美成超市場」という看板につられて入って行った所、百人が百人とも中国系ばかりで中国語で話し合っており、さらに魚にしる豚肉にしる一種独特な臭いが鼻をつき買う物もなく退散した事を記しておきたい。

さらに南キャリフォルニアのロスアンゼルス市および郡ではすでにヨーロッパ系住民が過半数を割っており、またリトル東京は現在では全米最大の日系人社会となっているのは御存知であろうが、バリオ地区を中心として住んでいる中南米系ヒスパニックがマジョリティになるのも時間の問題なのである。そしてもちろんこの地区で英語による義務教育、いや教育そのものが不可能なのであり、アフリカ系の住むワッツ地区と同様に「同化不可能」という口実のもとに切り捨てられ、従って治安も最悪の状態となっているのである。

こういったキャリフォルニアの現状を理解するためには、その州としての成り立ちをたどってみる必要があるであろう。かつては東部もそうであったように土着の原住民（かつてはインディアンなどと蔑称的に呼ばれていたが、現在ではアメリカン・ネイティヴズと呼ばれている）が住んでいたのが、16世紀の大航海時代にまずメキシコを征服したスペイン人がやって来る。従って現在の主な地名の大半はスペイン語のままとなっている訳であるが。合州国も1776年の英本国よりの独立後は西部開拓の時代となり、そして対メキシコ戦争によりキャリフォルニアをもついに奪い取ったその1848年、サクラメント川に砂金が発見されたのである。そして翌49年には早くも一攫千金の夢を求めて荒くれ男とそれに伴われた娼婦たちがどっと押しかけ“ゴールドラッシュ”の始まりとなる。そこでキャリフォルニアはサンフランシスコを中心にしてまず北から開かれて行く事となり、従って現在でも州都はサンフランシスコよりも北のサクラメントとなっているのである。ついであるがサンフランシスコに本拠を置く有名な

プロ・フットボール（サッカーでもラグビーでもない）のチーム名はこの年にちなんで“フォーティ・ナイナーズ”と付けられているのは御存知であろう。この北カリフォルニアの発展につれて鉄道建設とか農地開拓の労働者として中国人も太平洋を越えて移住して来るが、すでに1882年には中国人の移住は禁止となる。そして今度はハワイを越えて日本人も西海岸へと入植して来るが人種差別と偏見により市民権の取得資格（従って土地取得資格をも）は与えられず、ついに1924年には「排日移民法」により移住それ自体さえも禁止されたのである。アジア人のロッキー山脈を越えての中西部・東部への自由な移住などそもそも当初から許されていなかったのである。

ところで南カリフォルニアでは20世紀になると、何百キロにもおよぶ長大な給水計画が実現し、ブリティッシュ・ゴールドと呼ばれた石油の需要も増大し、さらには映画産業が東部の特許権益をのがれて移って来たりで、ロスアンゼルスを中心にして急成長の時代となる。さらに1965年の移民法の改正により中南米およびアジアからの移民がますます増大し、それ以上にメキシコ国境よりの不法入国者も跡を断たない現状となる。かくして南カリフォルニアでは他の地域以上にきわ立ってヨーロッパ系住民（マジョリティ）とアジア系・アフリカ系・中南米系（マイナリティ・グループ）がそれぞれ独立した地区に住み独自の文化圏を形成し、しかもはっきりとは眼に見えない形でのお互いの勢力と利権争いの場となっているのである。それ故に現在では先に述べたように、メルティング・ポットなどではなくサラダ・ボウルと表現するのが当を得ているのである。

最後にこれまでに述べたようなアンチ・テーゼを止場したジンテーゼとしての「文化」の考察は、サンノゼのある教会でふと眼にふれた標語“イユニティ　θルー　ダイヴァシティ”“ワールド　ピース　θルー　ダイアログ”のみを記すにとどめて次の機会にゆずる事として、もって肝に銘ずべく次の引用（日米の米は加州の加に置きかえて考えてもほぼ同じである）でもってこの稿の締めくくりとしたい。

日米間の諸問題を調整しつつ交友関係を維持することは日米双方にとって重要なことである。日米間に調整不可能な問題が生じるとは思われないが、日米関係の将来は必ずしも楽観はできない。日米関係をこじらせるいくつかの要因があるからである。第一に、日米が不均等な力関係にありながら、その力の差が相対的に少なくなっているという状況の下では、日米関係について両国間にイメージのギャップが生じやすい。第二に、両国政府はそれぞれの国内の利益集団の圧力によって拘束され、合意を妨げられることが、しばしば起こるかもしれない。第三に、両国が人種・文化的背景を異にすることから生ずる異和感が、何か日米間に問題が生じた際には、対立感を増幅することもありうる。第四に、太平洋戦争（「侵略者日本」）や占領（「支配者アメリカ」）という過去の心理的遺産が、対立の調整を阻害する要因となることも考えられるのである。

有賀貞「アメリカの対日政策の焦点」, 齊藤真他編『デモクラシーと日米関係』(南雲堂, 1973年)317ページ